AG5だより

日本人学校・補習授業校を応援します！

在外教育施設の高度グローバル人材育成拠点事業（https://ag-5.jp）

マニラ日本人学校日本語学級の実践

マニラ日本人学校教諭　島袋源大

昨年度末、マニラ日本人学校は新型コロナウイルスの影響で最後の一週間を休校とし、大幅に縮小した卒業式を行いました。その後もフィリピン国内の感染者数は増え続けており、本校は今年度がスタートしてから六カ月たった今も、残念ながら開校できずにオンラインによる授業を進めています。

今回は、コロナ禍でマニラ日本人学校が行ってきた「日本語支援の取り組み」について紹介します。

1　コロナ禍での学校の対応

四月後半からZoomを用いた始業式を行い、オンラインによる授業をスタートさせました。私も含めて教職員は初めての授業形態に困惑したり、ネットワーク環境の悪さに頭を悩ませたりと不安や焦りの中で日々を送りつつ、校内研修会で情報担当からアドバイスを受けながら、授業をつくってきました。

現在は、学校の教職員と児童生徒一人一人が学校専用のGoogleアカウントを持ち、それを用いてGoogleクラスルーム（課題の配布・提出）、Googleスライド（オンライン上のプレゼンテーションツール）、Googleジャムボード（オンライン上のホワイトボード）、Googleフォーム（オンライン上の課題提出）など、あらゆる方法を駆使して、児童生徒が分かりやすく楽しめる授業づくりに努めています。

2　日本語学級の取り組みについて

本校ではこれまで週一時間（金曜日の放課後）の日本語学級を設け、国際結婚家庭の児童を対象に取り出し授業を行ってきました。現在は二十五名ほどの児童が学習しています。

この日本語学級で学ぶ児童は授業中に自分の気持ちや考えを表現できなかったり、日本語の文章を書くことに苦戦したりする様子が見られます。英語やタガログ語（フィリピンの言葉）では理解できても日本語で学習するための言葉の力が十分でないことが原因と考えました。

これを支援するため、日本語学級では日本語で自分の考えを表現する活動や、体験的に学ぶような授業を行ってきました。

しかし今年度はコロナ流行の影響を受け、対面式の授業を行うことができない状況でした。日本語学級在籍児童は在籍学級のオンラインによる授業での課題を提出できなかったり、授業中の発言も少なかったりと、学習内容がどの程度定着しているのか、実態が見えない部分がありました。そのため、取り出し型の日本語学級を七月からスタートしました。

七月の日本語学級の授業は、どの学年も在籍学級における学習内容の補習やオンラインによる授業において学習内容がどの程度身についているかを確認し、実態把握をするといった内容になりました。

二学期が八月後半にスタートし、一学期の児童の様子をもとにオンラインで日本語学級の指導を行ってきました。

オンラインによる授業では、体験的な活動を取り入れることはかなり難しくなるという大きな課題はありましたが、教科と結び付け、在籍学級での学習と関連付けて指導を行ってきました。

各学年の日本語学級の取り組みと成果について報告します。

3　各学年の日本語学級の取り組み

(1) 小学部一年

日本語学級に在籍する児童は七名です。

フィリピンの「メリエンダ」を題材にして授業に取り組んでいます。メリエンダは日本でいう「おやつ」に近いものにあたります。普段から食べている各家庭のメリエンダを紹介する活動では、身近な生活と関わります。日本のおやつと比較する学習を取り入れることで、互いの文化に興味をもつようになりました。国際結婚家庭の児童にとって身近な二つの国でもあるため、意欲的に、そして楽しそうに取り組む姿が見られました。

この学習活動の最後には発表会を行います。友達の前で堂々と発表することでそれぞれの自信になると考

えています。

(2) 小学部二年

日本語学級に在籍する児童は八名です。

オンラインによる音読劇に挑戦しました。国語科の題材である「お手紙」の音読劇を在籍級よりも少し先に取り組みました。

まず始めに、音読劇とはどのようなもので、どのように取り組むのかを説明し、登場人物の気持ちを理解する活動を行いました。

音読劇の説明をする際、動画投稿サイトから児童の興味を引きそうな音読劇の動画を実際に見せました。そうすることで、児童は自分たちがこれから取り組む音読劇についてイメージをもつことができました。

また、初めから文を読むのではなく挿し絵の表情に注目させることで、登場人物の気持ちに気付かせることができました。

その結果、一人一役で登場人物になりきって気持ちを考えながら身振り手振りを加えて生き生きと表現活動をすることができました。また、場面をつなげて作品が完成したときは、児童はとても満足しているようでした。

振り返りの際には、「わ・か・め」(わかったこと、がんばったこと、次の時間のめあて)のモデル文を提示しました。まず、本時の学習で何を学んだのかを日本語で整理しました。次に何をしたいか、次の時間では、どんなことをめあてに頑張るのかということを日本語で表しました。

こうしたスモールステップにより、次の時間の目標をもつことができました。そして次の授業の最初には、前時の振り返りの写真を見せてから本時に入るようにしました。

(3) 小学部三年

日本語学級に在籍する児童は十三名です。

国語科「すがたをかえる大豆」の題材で扱う「炒る」「煮る」「蒸す」等の調理用語や、つなぎ言葉について、先行的に学習を行いました。

調理用語については動画で確認するだけでなく、イラストや動作化を取り入れたり、児童が既に知っている食品名と調理法をもとに考えさせたりすることで、個々の調理用語の理解をより深めることができました。スーマン等のフィリピンの食品も取り入れたことで、両国の食品により興味をもったり、食品名は違っても同じ調理方法があることに気付いたりすることができました。

つなぎ言葉については、図工科と関連付けてお気に入りの作品を順序よく友達に紹介する学習を通して、使い方を学ぶことができました。

学習後は、在籍級での学習の中で積極的につなぎ言葉を使って説明する姿が見られました。

(4) 小学部四年

日本語学級に在籍する児童は六名います。六名で一緒に学習をしたり、日本語力や学習の理解度に基づいて二〜三のグループに分かれて学習したりしています。

オンライン授業が継続しているため、通常学級・日本語学級ともにZoomで対話をしながら、Google クラスルームで課題配布と回収を行って授業を進めてきました。

国語の短歌・俳句の学習支援では、端末上で季節感漂う写真を見ながら季語を探し、画像に直接、気付きをメモしたり俳句を書いたりすることによってイメージと文字を視覚的に結び付ける学習指導を行いました。

俳句をつくるときだけではなく、友達の俳句を聞く際にも、俳句の表す背景を画像から読み取ることができ、マニラで生活をする児童にとっては、学習内容の理解を促す有効な手立てとなりました。

(5) 小学部五年

日本語学級に在籍する児童は二名です。この二名の児童は日本語力や学習言語力に差があるため、時には個別に指導を行うこともあります。

日本語学級では少人数で会話ができ、在籍学級の授業では発言が少ない児童も自ら話す様子が見られました。児童の日常生活に目を向け、そこから学習言語の理解につながるように指導しました。

算数の人口密度の学習では、先行学習として「こみぐあい」について学習しました。児童にとってもなじみのあるフィリピンのモールの写真を提示して、こみぐあいの大きいときと空いているときの様子について、児童は実体験を話しながら「こみぐあい」の言葉の意味について理解することができました。

また、日本語学級で使った言葉や図、式などを手元に置くことにより、在籍学級でも自信をもって発言する機会が増え、いかに先行学習が大切なのか実感できました。

在籍学級における日本語支援については、モデル文を用いた支援を行ってきました。授業中のグループ学習の場面で用いるジャムボードの画面上にモデル文を提示しました。児童は必要なときにそれらを用いて考えを表現しました。モデル文を用いた指導の効果を感じることができました。

(6) 小学部六年

現在、日本語学級に在籍する児童はいません。在籍学級には国際結婚家庭の児童が三名いますが、日常会話や学習会話での困難は見られません。

しかし、漢字の習得や文章中の副詞の読み取り、助詞の使い方など書く場面において十分ではない場面が見られます。そこで、日本語学級での指導方法のノウハウを応用して書く課題では丁寧な指導を心がけています。

また、自分の生活場面での例文づくりを行っています。楽しい例文を紹介することで「そういう経験は自分にもある」と共感し、書いた例文を「誰かに読んでもらいたい」とアピールするようになりました。

さらに、総合的な学習の時間にフィリピンの歴史を学習しました。ジオラマ写真と和訳のPDFを配信し、難しい語句には、「氷河期（とても寒い時期で、地上は氷が一面に広がっていました）」というように説明をつけて全ての児童にとって理解しやすいようにしました。何度か繰り返し読むことでフィリピンの歴史の概要を理解することができたようです。

4 オンラインによる日本語学級指導の成果

オンラインによる日本語学級では少人数だからこそ一人一人に目を向けられる時間の有効性を改めて確認できました。

在籍学級の授業ではなかなか発言できない児童も、日本語学級の少人数授業では生き生きと発言し、積極的に話をする児童が多くなりました。また、担任や日本語学級の他の児童に認められることで、在籍学級でも堂々と発言することができるようになりました。

オンライン授業においては、教師が一方的に説明をするような一斉授業になってしまいがちです。本校ではGoogleのサービスであるジャムボードやGoogleスライドを用いて授業を進めています。これらのサービスを利用することで児童はオンライン上のホワイトボードに絵や図を書いて自分の考えを示すことができます。そのため、児童は意見や考えを文章以外でも表現できるようになりました。

これらの機能を用いることで授業では自分の意見や感想を伝えたり、表現したりする場面が増えてきました。

今後、対面式の授業が再開されたときにもこのジャムボードを用いて話合い活動の場面を設定することで、ディスタンスを保ちながらも積極的な意見交換を促すことができると考えられます。

さらに、本校では一～三年生の日本語学級在籍児童数のiPadを購入し、対面式授業での導入を計画しています。一人一台の端末を使用することで、児童は自分のペースに合わせて動画を視聴したり、実際に端末を使って写真や動画を撮影したりすることができるようになります。

例えば、一年生の「かたち」の学習では、校内にある「まるいもの」や「しかくいもの」を写真に収めて紹介する活動も可能になります。

今後の対面式授業において、これまでのオンラインで培ってきた児童の表現活動を支える支援を進めるとともに、iPad導入による日本語指導の方法についても研究を進めていきたいです。

5 オンライン日本語学級指導における今後の課題

オンラインによる日本語学級指導の課題としては三つあげられます。

一つ目は「授業の目標設定と児童の活動時間（読む・書く・話す・聞く）の時間配分が難しいこと」です。日本語学級では少人数指導ですので、児童が課題に取り組む様子を在籍学級の指導よりもきめ細かく見取ることができています。そこで、それぞれの児童が書いたり読んだりする速さにバラつきがあることに気が付きました。個別に声を掛けたり絵や図などをいくつも見せたりして、書くことや読むことの支援をしてきましたが、授業時間内に達成できない児童もいました。今後はオンラインでも、それぞれの児童に合った支援の方法を模索していきたいです。

二つ目は「保護者による課題の確認が難しいこと」です。Googleクラスルームを通して課題や授業中のノート提出を行っていますが、保護者の協力が不可欠な状況です。日本語での課題配信のため、国際結婚家庭の児童においては提出できない場合もあります。保護者による課題の確認が難しいと考えられるので、今後の課題として取り組んでいきたいと思います。

三つ目は「体験的活動を取り入れることが難しいこと」です。教科の学習理解を支える体験的活動はオンラインにおいても必要なことです。オンラインが続く場合の体験的活動をいかに進めるか、今後の課題として取り組んできたいと考えています。